様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２７日現在

機関番号：１５５０１
研究種目： 基盤研究(C)
研究期間： 2010～2012
課題番号： 22520062
研究課題名（和文） ヒトと動物の宗教関係：日本・ジャワ・バリ・アボリジニの日常生活を通して比較する
研究課題名（英文） Religious relationship between human and animal: comparative study of religiosity in everyday life in Japan, Java, Bali, and Australian Aborigine
研究代表者
Ａｌａｍ Ｄｊｕｍａｌｉ (DJUMALI ALAM)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号： 10290991

研究成果の概要(和文):人と動物の関係において、もっとも顕著に働いている宗教性の原理は、自然（野生）と文化（都会）の二つの世界のつながりから成り立つ「関係タイプ」である、と見ることができる。こうした関係タイプは、「関係の場」と「関係のかたち」という二つの軸から見ることによって図式化することができる。現代日本・バリ・ジャワ・アボリジニには、いずれのタイプに近いものが、事例として現存するが、こうした図式から見るとことによって個々のケースの特徴を浮き彫りして捉えることができる。

研究成果の概要（英文）：The essential matter of religiosity that works on "human-animal relationship" is the "type of relationship" that has function to connect our two universe, that is natural (wild) and cultural (urban) space. This type of relationship can be schematized using two axis, that is "space of relationship" and "pattern of relationship". In contemporary Japan, Bali, Java and Australian Aborigine, we can find out every case that represent each "type of relationship", and also we can emphasize the character of each case by using this schema.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野： 人文学
科研費の分科・細目： 哲学、宗教学
キーワード：動物、バリ、ジャワ、自然、野生

１．研究開始当初の背景

「宗教」という文脈の中で「動物」が取り上げられる研究は、膨大な数に及ぶが、これらの研究は概して以下三つの性格と方向に分類することができる。(1)世界宗教の教義・儀礼に登場する動物観と人・動物関係のパターンを相互に比較しながら体系化する研究。(2)個々の地域や民族の歴史・神話・伝統・生活習慣に潜む動物観と人・動物関係のパターンを言語化して体系化する研究。(3)古代文明における原初的な動物観と人・動物関係のパターンを解明・解釈する研究。本研究は、(1)と(2)と(3)の研究領域と重なる部分を含むが、人・動物関係のパターンを、教義的・

思想的な枠組みに還元することはせず、あくまでも日常生活の次元において見られる関係パターンを、自然（野生）／不可視の世界と文化（都会）／可視の世界のつながりとして、理解・説明しようとする。

２．研究の目的
宗教生活における「人と動物の関係」について、対照的な宗教史と宗教文化をもつ四つの地域（日本、バリ、ジャワ、アボリジニ）を、比較宗教学的に考察して体系化すること。

３．研究の方法
本研究は、人と動物の宗教的な関係を、四つの地域を通して比較宗教学的な観点から探求して視覚的に説明しようとするものである。収集する資料は、日本・ジャワ・バリに関しては、ほぼすべてが一次資料である（アボリジニに関しては二次的資料も大きな割合を占める)。収集する資料の内容は、四つの地域に見られる、以下に関する人と動物の関係形態である：(1)狩り、(2)摂食、(3)供犠、(4)供養、(5)従属、(6)共生、(7)鑑賞、(8)模倣と接触、(9)ペットとコンパニオン、(10)タブーと崇拝、(11)記号化、(12)化身と変身。資料の収集の方法は、観察（参与観察を含む)、撮影・取材、インタビュー・面接、文献資料、の方法を用いる。収集の際の問いは、基本的には、上記十二の人と動物の関係形態が、各地域において、いかなるものであり、どのようにして起こり、なぜ起こるのか、という点に絞る。

４．研究成果
人と動物の関係を、自然（野生）と文化（都会）の二つの世界のつながりから成り立つ「関係タイプ」として体系化するということは、こうした関係を、「関係の場」と「関係のかたち」という二つの軸から見ることによって包括的・本質的に図式化することができる。「関係の場」の軸としては、「人間界」「野生界」「中間の世界」「人間界→野生界」「野生界→人間界」の五つの場が想定できる。「関係のかたち」としての軸としては、「現実」「仮想」「部分」の三つのかたちが想定できる。この二つの軸から見ることによって、人・動物関係のタイプは、以下１５のタイプに分けてみることができる。現代日本・バリ・ジャワ・アボリジニには、いずれのタイプに近いものが、事例として現存するが、こうした図式から見るとことによって個々のケースの特徴を浮き彫りして捉えることができた。

(1)人間界の場における現実のかたち。このタイプに近い事例としては、日常生活におけるもっとも身近な事例が多く存在する。すなわち「ペット」（コンパニオン・アニマルを含む)、「観賞」（動物園、水族館など)、「協働（コラボレーション)」（主に使役動物、サーカス、イルカショーなど、人と動物が協働で仕事をするケース)、「競技」（乗馬、競馬、水牛レース、闘鶏など）として現れている。このタイプの諸ケースのうち、ペット、協働、競技は、日本・ジャワ・バリにおいて顕著に見られるが、観賞は、とりわけ日本において目立っているケースである。

(2)野生界の場における現実のかたち。このタイプにもっとも近い事例は「狩猟」（川や海での漁を含む)」である。そのほか、現代においてはやや特殊なケースとしての、「都会を離れ、進んで自然・野生に近い環境で暮らす」というパターンが見られる。いずれのケースも、動物との交流の場が、人間界ではなく野生界に求められる、という点で一致する。狩猟は、日本・ジャワ・バリにおいて顕著に見られるが、「自然の暮らし」は現代日本においてもっとも顕著に見られる。

(3)中間的世界の場における現実のかたち。このタイプにおける関係の場は、文字通り、人間界と自然界の中間に位置する。このタイプに含まれる事例としては、「共生」（人間界の中で一定の自然的・野生的環境を保とうとする種々の試み」、共生に近い「観賞」（サファリや放し飼いの動物園など)、保護区などがあげられる。こうした中間的世界の成り立ちは、ジャワとバリにおいて見られるように、人間社会の都市化過程と並行して自然に生まれた場合もあれば、現代日本において見られるように、自然・野生へ回帰する文脈の中で恣意的に進められた場合もある。

(4)人間界→野生界の場における現実のかたち。このタイプにおける関係の場は、“変化”し、その“過程”が人・動物関係のタイプをなしているというのが特徴である。この場合の変化は、人間界から野生界への移行過程である。このタイプに近い事例としては、それほど多くはないが、「帰化」（人間界に生きる動物を自然に返す試み）と「供犠」（動物の生け贄儀礼）があげられる。帰化は、トキのケースをはじめ、現代日本でよく見られる人・動物関係である。供犠は、現代日本においては無縁と言えるが、ジャワとバリにおいては顕著に見られる。ジャワではイドゥルアダ（イスラム教の一儀礼である犠牲祭）が典型例（対象動物は山羊、羊、牛、水牛）である。バリでは、寺院の誕生祭にあたる「オダラン」が典型例（対象動物は豚）である。供犠が、人間界→野生界への移行過程であると見ることができるのは、「死の世界」が「未知なる自然・野生界」として人々に捉えられるからである。

(5)野生界→人間界の場における現実のかたち。このタイプにおける関係の場も、前記と同様、“変化”とその“過程”による移行が伴うものである。この場合の変化は、野生界から人間界への移行過程である。このタイプに近い事例としては、人間界（文明社会）に重きを置いている現代社会においては希少となっているが、ジャワとバリに一部残っているものとしては、野生動物を捕える過程を含む（そうした過程からはじまる）「ペット」（ペット化）「協働」「共生」「観賞」があげられる。一方、かつてのアボリジニにおいては顕著に見られ、現代のジャワ・バリ・日本においても部分的に残っている事例としては、人間界への延長過程を含む「狩猟」および動物や昆虫の「採集」があげられる。

(6)人間界の場における仮想のかたち。４－(1)の“仮想”版である。すなわち、人間界における人と動物の関係が、現実世界ではなく、物語、映像、芸術作品、儀礼として現れる場合である。日本・ジャワ・バリ・アボリジニのすべての地域において顕著に見られるケースだが、それぞれの現れ方には特徴が見られる。現代日本においては、アニメ、漫画、童話の世界において顕著に見られる。とりわけ、洗練された“擬人化”の手法によって、こうした表現方法は確立・定着した。ジャワにおいては、舞踊、演劇、舞台芸術の世界において顕著に見られる。バリにおいては、舞踊・演劇・舞台芸術に加え、儀礼の世界において顕著に見られる。アボリジニにおいては、物語（神話）と舞踊の世界において顕著に見られるが、さらには「トーテミズム」と呼ばれる彼らの社会・文化体系そのものに深く包括的に表現されている。

(7)野生界の場における仮想のかたち。４－(2)の“仮想”版である。すなわち、野生界における人と動物の関係が、現実世界ではなく、物語、映像、芸術作品、儀礼として現れる場合である。日本・ジャワ・バリ・アボリジニのすべての地域において顕著に見られるケースだが、それぞれの現れ方には特徴が見られる。現代日本においては、前記のタイプほど顕著ではないが、アニメ、漫画、童話の世界において見られる。この場合の表現方法は、厳密にいえば擬人化ではなく“擬動物化”になるはずだが、結局は擬人化にとどまらざるをえない面がある。ジャワにおいては、舞踊、演劇、舞台芸術の世界において顕著に見られる。バリにおいては、舞踊・演劇・舞台芸術に加え、儀礼の世界おいて顕著に見られる。アボリジニにおいては、物語（神話）と舞踊の世界において顕著に見られるが、さらには「トーテミズム」と呼ばれる彼らの社会・文化体系そのものに深く包括的に表現されている。

(8)中間的世界の場における仮想のかたち。４－(3)の“仮想”版である。すなわち、人間界と野生界の中間における人と動物の関係が、現実世界ではなく、物語、映像、芸術作品、儀礼として現れる場合である。日本・ジャワ・バリ・アボリジニのすべての地域において顕著に見られるケースだが、それぞれの現れ方には特徴が見られる。現代日本においては、前々記のタイプ以上に、アニメ、漫画、童話の世界において顕著に見られる。この場合の表現方法は、ジブリ作品においてしばしば見られるように、擬人化と擬動物化の中間をなす場合が多い。ジャワにおいては、舞踊、演劇、舞台芸術の世界において顕著に見られる。バリにおいては、舞踊・演劇・舞台芸術に加え、儀礼の世界おいて顕著に見られる。アボリジニにおいては、物語（神話）と舞踊の世界において顕著に見られるが、さらには「トーテミズム」と呼ばれる彼らの社会・文化体系そのものに、深く・包括的に表現されている。

(9)人間界→野生界の場における仮想のかたち。４－(4)の“仮想”版である。すなわち、人間界から野生界に移行する場における人と動物の関係が、現実世界ではなく、物語、映像、芸術作品、儀礼として現れる場合である。日本・ジャワ・バリ・アボリジニのすべての地域において顕著に見られるケースだが、それぞれの現れ方には特徴が見られる。現代日本においては、アニメ、漫画、童話の世界において顕著に見られる。この場合の表現方法として特徴的なのは、こうした移行過程が、「変身」（および「化身」）という独特のパターンによって表現されるという点である。ジャワにおいては、舞踊、演劇、舞台芸術の世界において顕著に見られる。バリにおいては、舞踊・演劇・舞台芸術に加え、儀礼の世界おいて顕著に見られる。アボリジニにおいては、物語（神話）と舞踊の世界において顕著に見られるが、さらには「トーテミズム」と呼ばれる彼らの社会・文化体系そのものに、深く・包括的に表現されている。

(10) 野生界→人間界の場における仮想のかたち。４－(5)の“仮想”版である。すなわち、野生界から人間界に移行する場における人と動物の関係が、現実世界ではなく、物語、映像、芸術作品、儀礼として現れる場合である。日本・ジャワ・バリ・アボリジニのすべての地域において顕著に見られるケースだが、それぞれの現れ方には特徴が見られる。現代日本においては、アニメ、漫画、童話の世界において顕著に見られる。この場合の表

現方法として特徴的なのは、こうした移行過程は、前記と同様、「変身」（および「化身」）というかたちによって表現されるという点である。ジャワにおいては、舞踊、演劇、舞台芸術の世界において顕著に見られる。バリにおいては、舞踊・演劇・舞台芸術に加え、儀礼の世界おいて顕著に見られる。アボリジニにおいては、物語（神話）と舞踊の世界において顕著に見られるが、さらには「トーテミズム」と呼ばれる彼らの社会・文化体系そのものに、深く・包括的に表現されている。

(11)人間界の場における部分的なかたち。４－(1)の“部分”版（または“接触”版）である。すなわち、人間界における人と動物の関係が、動物の等身大のかたちとしてではなく、身体的部分（動物の死後）またはシンボルとの接触を介して成立する場合である。具体的にはこうした関係は、デザインの世界（ファッション、アクセサリーなど)、模型（動物像、剥製など)、人間による動物的原理の模倣（衣食住、舞踊、科学、スポーツ、日用道具など）として現れる。日本・ジャワ・バリにおいて顕著に、また量的にもほぼ対等に見られるケースである。

(12)野生界の場における部分的なかたち。４－(2)の“部分”版（または“接触”版）である。すなわち、野生界における人と動物の関係が、動物の等身大のかたちとしてではなく、身体的部分（動物の死後）またはシンボルとの接触を介して成立する場合である。このタイプに近いケースは、現代の日本・ジャワ・バリにおいては希少といえる。一方、アボリジニにおいては、こうした関係タイプは、デザインの世界（ファッション、アクセサリーなど)、芸術作品（とりわけ視覚芸術)、人間による動物的原理の模倣（とりわけ音楽と舞踊の世界）として顕著に現れている。

(13)中間的世界の場における部分的なかたち。４－(3)の“部分”版（または“接触”版）である。すなわち、人間界と野生界の中間における人と動物の関係が、動物の等身大のかたちとしてではなく、身体的部分（動物の死後）またはシンボルとの接触を介して成立する場合である。このタイプに近いケースは、現代の日本・ジャワ・バリ（とりわけ日本）において顕著に見られる。すなわち、人間が、自然界・野生界と隣接した場所に居住地や活動拠点を設け、デザインの世界（ファッション、アクセサリーなど)、模型（動物像、剥製など)、人間による動物的原理の模倣（衣食住、舞踊、スポーツ、日用道具など）を営んだり楽しんだりする場合である。

(14)人間界→野生界の場における部分的なかたち。４－(4)の“部分”版（または“接触”版）である。すなわち、人間界から野生界に移行する場における人と動物の関係が、動物の等身大のかたちとしてではなく、身体的部分（動物の死後）またはシンボルとの接触を介して成立する場合である。このタイプに近いケースは、現代の日本・ジャワ・バリにおいて見られるが、とりわけ日本で盛んに起きている。典型的なケースとしては、死にゆく動物への感謝や償いの意を込めて行われる「供養」および動物の弔いに関する一連の儀礼・行事・慣習などがあげられる。

(15) 野生界→人間界の場における部分的なかたち。４－(5)の“部分”版（または“接触”版）である。すなわち、野生界から人間界に移行する場における人と動物の関係が、動物の等身大のかたちとしてではなく、身体的部分（動物の死後）またはシンボルとの接触を介して成立する場合である。このタイプに近いケースは、現代の日本・ジャワ・バリ・アボリジニのすべての地域において顕著に見られる。具体的なケースとしては、「狩猟」と「採集」の延長線上にある、動物の身体部分を「観賞」目的に人間界に移行させるという過程が、これにあたる。

今回の研究では、上記タイプ(1)から(15)のうち、とりわけ現代日本におけるタイプ(6)から(10)までの実態が、示唆的な発見として、今後の研究課題への発展を見ることとなった。すなわち現代日本におけるサブカルチャーの世界で、人々の宗教性の“ニーズ”が「人と動物の関係」によって充足・補われているという精神構造からは、現代日本の宗教を理解するための重要なファクターが浮き彫りになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Djumali ALAM、宗教とは何か？―認知宗教学的な視点からの探究、山口大学哲学研究会、査読無し、18 巻、2011、1-23

６．研究組織

(1)研究代表者

Ａｌａｍ　Ｄｊｕｍａｌｉ(DJUMALI ALAM)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号： 10290991

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：